

いったのである。

最後にもう一首、明治四十五年の作である

富士見野はまだ霧居れど八つが岳の雲開き来て花見え渡る

の歌について眺めてみたい。この歌は「花と煙」の標題の一連十一首中の第三首で、標題のあとに「壬子一月湯本禿山に逢うて去歳の信濃を思ふ」という詞書が添えられ、前年の九月下旬、左千夫が富士見野から諏訪、松本を経て、湯田中に遊んだときの思い出を、壬子の年、すなわち明治四十五年の一月中旬、信州の「アララギ」同人である湯本禿山（政治）が上京して左千夫の家に泊まったのをきっかけに、回想歌として詠んだうちの一首である。

富士見野からは八ヶ岳の山裾がまっすぐに見渡され、草原そのものが八ヶ岳の山裾の一部をなしているといった地勢となっている。八ヶ岳にかかっていた雲が切れるにしたがって、富士見野には、去来する霧はありながら、咲き乱れる秋草の花野の様が一望のもとに見渡されるというのである。

斎藤茂吉は『左千夫歌集合評 下』において、「写生といふ活動が、決してその場で直ぐ実行されなくともいいといふ証拠がこの歌などに好くあらはれてゐると思ふ。」と述べている。そのように、この歌は、回想の歌であるにもかかわらず、読む者をして今ひろびろとした富士見の花野に立っている思いを起こさる「印象明瞭」の一首ということが出来る。その意味で、前年の富士見野での感銘がこの歌を生ませたのであって、子規や節に比較すると、視力が弱かったことなどもあって、どちらかという写生を不得手とする左千夫に、こうした写生的な歌を作らせたのは、起伏眺望に富んだ信州の自然であり、そこに左千夫短歌に対する信州の風土の文芸的な意味での深い関連が見ら

れるということになる。

それは、格堂や節のように子規の唱えた写生の忠実な実践者ではなかったところの左千夫が信州の風土に接し、また親しむことによって、改めて子規から教えられた写生を身につけることになったということであり、そこに左千夫短歌と信州との風土的関連を認めることができるのである。

いる。ここで、こうした詠みぶりの相違が生じた理由について考えてみると、その一つの理由として、前者の場合、九十九里浜の茫漠とした大景は描写が困難で、ひたすら詠嘆に傾き、大自然の中に立つ孤独な感情の表出となったが、後者においては、諏訪湖の風景が優美なまともいっをもつていて、九十九里浜の大景に比して、いわば中景的とでもいった親しみやすさがあったということが考えられる。そうした信州の自然を歌おうとした結果、あのように優美で日本画的構図をもった一首となり、それが九十九里の歌とは違って感情の表白を抑えることになったと思われる。

次に明治三十九年の作である「蓼科游草」の中の

奈良井川さやに霧立ち遠山の乗鞍山は雲おへるかも

の歌について考えてみたい。左千夫は明治三十九年八月五日に東京を出発、六日に松本に着き、そこで初めて胡桃沢勘内、望月光らと対面した。この歌の前には、

翌七日胡桃沢・望月の二子予を山辺の湯に誘ふ。山辺の湯は又湯の原の湯とも云ふ。

と詞書がついていて、この歌は山辺の湯付近の小高い場所から遠望した趣の作となっている。近景に奈良井川の川霧を置き、遠景に乗鞍山にかかる雲を配して、山辺の湯から見た夏の朝の景観を絵画的な構図によって歌っている。先に「二」で見てきたように、左千夫の歌の一般的な特色は、豊かな声調による力強い内面の表出という点にあらわれており、彼を指導した子規が説いたような、対象の視覚的描写ということには、あまり意を注がぬ傾向が強かったのであるが、この「奈良井川……」の歌をはじめ、信州を訪れての作品には、絵画的描写を伴った写生が多く見えている。左千夫は千葉県の九十九里浜に近い平坦

な土地に育った。そのこともあって、起伏に富んだ蓼科高原に心魅かれたように、左千夫はその後もたびたびここを訪れている。左千夫はこの歌の詞書の中で「此のあたりの地名殊に優美にして趣亦それになふ」と述べているが、このことばに見られるように信州の自然から得た深い感銘が、彼の信州における作歌に絵画的描写を多くしていったと言えるであろう。

今述べたようなことは、明治四十二年の、浅間温泉での作品、

秋風の浅間のやどり朝露に天の門ひらく乗鞍の山

についても言える。この歌は、吹いてくる秋風が肌寒さを感じさせ、朝露のしとどにおりた浅間温泉から一連の山並みを眺め、その中でも一きわ高くそびえ立つ乗鞍の山容に見入っている歌で、作者のいる浅間の湯の位置を明らかにしつつ、遠景の山並みの中に他を圧してそびえる乗鞍山を描くことで、遠景と近景という空間を感じさせる絵画的構図の確かな作品となっている。

もちろん、この歌においても、左千夫短歌の特色とされる豊かな声調による叙情がないわけではない。初句から第四句までア音の頭韻をふみ、結句を体言止めにしたあたり、麗朗たる声調の一首とということができ、それが初秋の早朝、乗鞍の秀峯に接した感動を伝えるのに役立つている、景と一体化しつつ、声調にのせた叙情ということもできるのであるが、「二」において見た五首のような、直截的な感情の流露は抑えられており、表現に即していえば、作者の感銘した対象をできるだけ視覚的に描写することに重点がおかれているということになるろう。

このように見てくると、この歌の場合も、風趣に富んだ信州の自然の規制のもとに、彼の歌は風物に即して歌う写生的傾向を強くして

に発表された。ロシア討つべしという強硬な主張を、二十一首という連作により、一首の感情をさらに相互に照応させることによって異常な興奮をもって歌い上げているのである。この一首だけを見ても、「にくにくし」と「憎し」を強めた表現、ロシア人を「夷よみ」といったところ、また「なぎて尽さね斬りてつくさね」と他者に行動の実現を希望する助詞の「ね」を付けてくりかえしたことなどから、きわめて感情の高揚は顕著であり、初句と下二句にくりかえしをもつ強い声調によって、興奮した感情のあふれるような歌となっている。

以上、「牛飼が歌詠む時に……」、「元の使者既に斬られて……」、「白木綿の花と湧き立つ……」、「にくにくしロシア夷を……」という、左千夫の比較的初期の作品を取り上げて彼の歌風を眺めてみたのであるが、これらの歌に共通して言えることは、万葉集などにならって、やや古風ではあるが朗々たる調べをもって歌っており、感情が強く表出されているということ、そこには、先に子規・格堂・節の三名の歌に共通して認められた、感情をことばに表わすことを抑えて、対象を絵画的に描写するという写生の手法があまり用いられていないことが知られる。すなわち、子規・格堂・節らの写生重視の作風とは対蹠的に、左千夫の歌は豊かな調べと一体になった叙情歌である点に特色が見られるのである。

三

ここで、左千夫の短歌は信州の風土に接することによってどのように変貌し、熟成していったかという点について、彼の作歌を実地に見てゆくことにしたい。

まず、明治三十七年十一月、初めて信州入りして諏訪湖を訪れたときの作である

汲湯して小舟こぎゆく諏訪少女湖の片面は時雨降りつつ
の歌について見てみよう。この歌の前に

二十五日上諏訪に至る。久保田山百合道にありて予を待つ。一見旧の如く相携へて旗亭にゆく。二十六日諸同人遠近相会するもの
十余人、徹夜歌を詠む。

と左千夫は詞書を記している。はるばる来たって初めて信州の同人たちと会した彼の喜びはこの詞書に明らかであるが、その夜の歌会での作である右の歌では、信州の風物に触れた喜びをじかに表出することをしていない。第一句の「汲湯」は『左千夫歌集合評』の中の土屋文明の説明によれば、諏訪で天然に湧く温泉の湯を炊事などのために汲んでゆくことをいう方言らしい。久保田山百合（島木赤彦）あたりから、この汲湯について説明を受けたものである。歌全体では、汲湯して舟を漕いで帰ってゆく土地の少女に焦点を当てながら湖の片面が時雨している情景を描いて、日本画でも見るような、静かな中に明るさの感じられる一首となっている。

ここで、彼の故郷の九十九里浜を詠んだ

天雲のおほへる下の陸くわ広ら海うみ広らなる涯はてに立つわれは

の歌と、この「汲湯して……」の歌とを比較してみると、前者では目前に九十九里浜についての描写はほとんどしておらず、広々とした大自然の中に一人立つ感情を、朗々とした声調の全身のともいえる強い詠嘆で歌い上げている。それに対して、後者ではその一隅が時雨する諏訪湖を背景に、汲湯して舟を漕ぐ少女を描くことを主眼にしており、その描写は一幅の優美な絵画を見る趣で、直截的な詠嘆は抑えられて

という歌がある。先に掲げた左千夫の歌と、この子規の歌とを比較してみれば、左千夫の歌の叙情的性格を知ることができよう。そして根岸派と対峙する存在であった新詩社の機関誌「明星」において左千夫の歌を取り上げて「庄巻の佳作」とまで激賞した点について考えてみると、これは「ますらをぶり」を唱えた叙情詩人の鉄幹が、根岸派の歌にはあまり見られない強い叙情を左千夫の短歌に発見し、共鳴したものと見ることができる。

さらに

白木綿の花と湧きたつ玉もひのうまし乳酒は飲めど飽かぬかも

象の描写を主眼とするところの「面白き事実を写す」方法と、枕詞・序詞・新たな造語などの表現上の技巧をこらすことによって華麗な調べを用いて歌うところの「事実を面白くする」方法との二つがあるが、この二つの方法のうち上乘なるものは後者であって、前者はそれより劣る。万葉集の歌は「事実を面白くする」行き方によって「価値を發揮し、其の歌は光彩を百世の下に放」っているのであると述べている。

この主張から見ると、問題の歌も、万葉集の笠金村の

山高み白木綿花に落ちたぎつ瀧の河内は見れど飽かぬかも（巻六・九〇九）

の歌について考察してみたい。この歌は「心の花」（明34・12）に載った「詠乳酒之歌」と題する長歌の第一反歌で、歌に詠まれているクミスというの、普通、モンゴル・中央アジアなどで飲用に供している馬乳からこしらえた酒というが、この歌の場合は、長歌によれば牛乳から作っており、ヨーグルトのたぐいらしい。古代、祭祀に用いた植物繊維の木綿の花のように泡立つクミスは、いくら飲んでも飽かず、

の歌などにならって、豊かな声調による叙情ということに眼目があったと考えられる。上二句が、醸成の際に泡立っている様なのか、それとも器に注がれるときに泡立つ様なのかあいまいであるというこの歌の難点も、対象の描写よりも重厚な声調を重視したために生じたものと言ってよいであろう。

貞 光 威

最後に、もう一首

にくにくしロシヤ夷を片なぎになぎて尽さね斬りてつくさね

おいしいことよと歌っている。この歌の上二を『左千夫短歌合評』（「アララギ」昭47・1）で小松三郎氏は、乳酒が醸造の際に泡立っている様を描いていると考えておられるが、これはまた、それとは別に、「玉もひ」すなわち美しいグラスに泡立ちながら注がれていく様と見ることもできる。しかし左千夫が言おうとしたのがそのいずれであったにせよ、

の歌について見てみよう。この歌は明治三十七年一月八日の新聞「日本」に掲載された「起て……日本男児」と題する連作二十一首のうち第五首で、標題につづいて

その様子を描写するところに左千夫の意図があったのではなく、彼としては万葉調でもって調べ高く歌い、高揚した感情を表白することに目的があったと考えられる。

限りなき敵国の横暴は遂に吾内閣の諸公をして一大決断を覚悟せしむ正に眼前に迫れる活劇を想へば吾等一介の文士と雖も猶神飛び肉躍る即中霄寒硯を磨して短歌二十一首を賦す。

左千夫は、この歌を詠んだ明治三十四年、「心の花」に「新歌論」を発表してその短歌観を明らかにしている。それによると、作歌には対

と述べていることからわかるように、この年二月十日に始まる日露戦争直前の、開戦の気運の高まりの中で、「日本主義」を標榜してナショナリズムの立場を鮮明に打出し、その急先鋒に立っていた新聞「日本」

主観の表出を抑えて、視覚的に対象をとらえた写生の方法によって作歌しており、いずれも子規の歌風に近いものである。

ところが、格堂や節と同じころ子規に入門した左千夫ではあるが、彼の場合は子規とはちがった叙情味の濃い歌風を見せた。その点について、子規がまだ生きていて直接に指導していたころの歌をとり上げて、左千夫の歌風を見てみることにしたい。

まず、左千夫を代表する歌としてよく知られる

牛飼が歌詠む時に世の中のあたらしき歌大いにおこる

について見よう。この歌は、正確な制作の時期は不明であるが、同じ子規門の岡麓が『左千夫歌集合評 上』（八重山書店 昭22・6）の中で

この歌は、根岸庵を訪問して間もなく詠まれた歌のやうに記憶してゐます。順序から申しますと次の新年雑詠の方が少くも半月位前のものでしたでせう。

と述べているところなどから考えて、左千夫が子規のもとに入門して間もないころの作と考えてよいであろう。この歌には、これまで歌というと公家など一部の人々のもてあそびものにすぎなかったが、牛乳を搾ることを生業とする庶民の自分のような者も歌を詠む時が来て、いまこれからは日本の新時代にふさわしい歌が大いにおこるのだという庶民意識、身辺性、日常性の歌への主張がこめられている。東京本所茅場町で、みずから牛乳搾取業を営みつつ歌を作っていた左千夫の、新派歌人としての抱負を示す歌で、新派和歌の黎明期を迎えて意気軒昂たる彼の気魂が「牛飼が」という出だしや、第三句以下の、特に結句の「大いにおこる」のオの音を重ねた力強い詠みぶりに現れている。

この歌は子規やその門下の格堂、節の歌に見られたような叙情を抑

えて情景を絵画的に描写するといった写生の方法はとっておらず、気魄に満ちた感情を力強く歌い上げることに重点をおいた叙情的な作品であるといえるであろう。

次に、やはり左千夫が子規に入門して間もないころの作である

元の使者既に斬られて鎌倉の山の草木も鳴り震ひけむ

の歌について見てみたい。この歌は「鎌倉懐古十首」の兼題で詠んだ中の一首で、明治三十三年五月六日の新聞「日本」に掲載された。建治元年（一二七五）、執権北条時宗が元の使者杜世忠らを鎌倉の龍の口で斬った史実に思いをめぐらし、元への服属入貢を迫る世祖フビライの使者を斬って固い決意を示した時宗の気迫に鎌倉の山の草木も恐れおののいて鳴り震ったことであろうと歌っている。その歌いぶりは「元の使者既に斬られて」と重々しく歌い始め、そのあとほとんど休止をおくことなく直線的かつ漸層的に結句に向かって進んでゆく。その緊迫した声調は、この歌の悲劇的な内容にふさわしいものがある。これを先の歌と対比してみると、身辺性ではなくて小説的内容であり、その物語りを通して心情を高ぶらせ、表現しているという点で、その意味では空想的であるが、それだけに精神の高揚が著しい。

子規が「日本」紙上でこの歌について「吾は之を天位に置けり。悲壯の感に打たれたるなり。」と評したのも、その点について言ったものである。与謝野鉄幹も、これを受けて、「明星」第三号（明33・6）の「歌壇小観」で『元の使者』の一首は氏の批判の如く庄巻の佳作である」と賞賛した。この文中の「氏」というのは、左千夫の歌を「日本」で紹介しつつ「天位に置けり」と評した子規のことを言っている。

この歌と同じ「鎌倉懐古十首」の題で子規が詠んだ歌に

鎌倉にわが来てみれば宮も寺も賤の藁屋も梅咲きにけり

えるけれども、賢治が生きた東北地方における春は、緩慢に漸を追うてやってくる関東や関西におけるそれと異なり、吹雪が止まず、鉛色の重い空の冬がつづいていたあと、突如として一斉に押し寄せる。雪国の春はおおまかで、端的で、ひと息にやってくる。その点において、かえって冒頭の一行は真实性をもつのであって、ここに賢治文学の東北の風土との結びつきが見られる旨を述べておられる。

拙稿は、高木博士が述べておられるように、風土・自然がいかに作家の文芸の創造に参加し役立っているかといった関係を考察することこそ最も深い意味での文芸学における風土の研究であるという考えに立って、いかに左千夫の短歌制作に信州の自然・風土が関係し影響したかについて見てゆこうとするものである。

二

本論にはいるまえに、その前提として、左千夫短歌の基本的な性格としての豊かな声調と一体になった強い叙情的性格について確認しておくことにしたい。

伊藤左千夫は昭和三十三年に正岡子規に師事し、作歌の指導を受けるようになったが、同じころ子規に作歌を学ぶようになった赤木格堂や長塚節が子規の写生の方法を最初から身につけて作歌していったのに対して、左千夫の方は、それに手間どり、独自の作風を展開していった。

その点について、松井利彦氏の「子規における『写生』」(『正岡子規の研究 上』明治書院 昭51・5 所収)を参看させていただきつつここに概観してみると、子規は明治二十七年に、画家の中村不折を知り、彼から西洋画の写生について学んで、それを彼はまず句作におい

て応用する。それは、作者の感情を作品に直截的に表出することを避けて、自然の事物を色彩、形状、遠近などによって絵画的に描写し、それによって読む者に美を感じさせようというもので、

掛稲の上に短し塔の尖 明27

菜の花の四角に咲きぬ麦の中 昭28

連翹やたばねられたる庭の隅 明29

といった句は、そうした写生によって生まれたものである。

やがて子規はこうした手法を短歌にも導入するようになり

椽先に玉巻く芭蕉玉解けて五尺の緑手水鉢を掩ふ 昭31

緑立つ庭の小松の梢より上野の杉に鶯の居る見ゆ 明31

くれなゐの二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに春雨のふる 明33

などのように立体的な構図をもち、色彩感に富んだ絵画的な作品を作つてゆく。

以上、松井氏の論考によりつつ子規における写生について概観してきたが、子規に赤木格堂が入門したのは明治三十二年で、九月の短歌会から出席し、また長塚節は三十三年に入門、四月から歌会に出席した。入門当時の二人の歌を見てみると、格堂には、

亀井戸の社の庭に咲きさかる藤長うして水に垂れたり。 明33

桜咲く谷べ静かに鳥なきて吾立つ峯の上に日高し 明34

といった歌、また節には、

ガラス戸のそとに飼ひ置く鳥の影のガラス戸透きて畳にうつりぬ 明33

押し照れる月夜さやけみ鳥網張る秋田の面に霧立ちわたる明34
などがある。これらの作を見ると、格堂の作品も、節のそれも、共に

左千夫短歌と信州

——風土的関連について——

貞 光 威

Sachio Itoh and Shinano : Relationship
between his *Tanka* Poems and the Nature
of the Province.

Takeshi Sadamitsu

一

伊藤左千夫は周知のように九十九里浜に近い、千葉県山武郡成東に生まれたが、数え年二十二歳のとき上京して牧場に勤め、二十六歳のときには本所茅場町で牛乳搾取販売業を開業した。そして彼はそのころから文学への関心を深め、短歌や小説等の創作にとめるようになり、東京で牧牛によって生計の道を講じつつ創作を行なう。そして、こうした彼の生活は生涯に及んだ。

このように彼の文学活動はほとんど東京においてなされたといつてよいのであるが、しかしまた、彼は各地を旅し、その旅先で歌を詠じ、紀行文等を書いている。彼が訪れた先としては、彼の故郷の千葉県を除いても、日光、興津、松島、筑波山、浜松、名古屋、諏訪、長野、大垣、京都、奈良、沼津、甲州御嶽、越後鯖石などいろいろ拾うことができるが、その中で特に注目されるのは、信州すなわち長野県に彼が頻繁に足を向けているこ

とであって、その回数は今判明しているだけで十回に及び、滞在日数は通算約八十日に達し、そこで彼は、同地の島木赤彦、篠原志都児(千洲)、胡桃沢勘内、堀内卓、望月光らと親しい交わりを結んだのであった。

その点については、『左千夫全集』第八巻に付けられた詳細な年譜や、胡桃沢勘内の「思ひ出づるまゝ」(「アララギ」大2・11 伊藤左千夫追悼号)、島木赤彦の「左千夫先生と信濃」(「アララギ」大8・11 第二左千夫号)などの回想によって大体を知ることができるが、その後、信州在住の山田良春氏によって『子規・左千夫・節と信州』(「子規・左千夫・節と信州」刊行会刊 昭42・5)と題する研究書が刊行されて、左千夫の信州入りの際の足跡や詠歌、遺墨などを明瞭に把握できるようになった。

そこで、この稿においては、信州における左千夫の足跡や詠歌などといったことについては、すべて山田氏の調査研究にゆだねることにし、そのかわりに、諏訪湖や蓼科高原、また富士見野などといった信州の風物に触れ、かかわりをもつことによって、彼の文学、特に短歌が変貌を見せ、熟成していった一面があるのでないかという点について、いわば左千夫短歌と信州との風土的関連という一点だけにしぼって考察することにした。

ここで文芸の風土との文学的な意味における関係ということについて述べておくと、故高木市之助博士は『古文芸の論』(岩波書店 昭27・5)所収の「文芸の風土的関連について」と題する論考において、宮沢賢治の「陽が照つて鳥が啼き／あちこちの檜の林も／けむるとき／ぎちぎちと鳴る汚い掌を／おれはこれからもつことになる」の詩を例に、冒頭の一行は一見すると抽象的で間の抜けた自然描写のように見